

「主によって遣わされる」

本日、5月の第2日曜日は母の日であります。先日、大阪府内にある特別養護老人施設において防護服姿のご夫婦が赤いカーネーションの花を手に、一年ぶりにベッドに横たわる母親に面会を果たされた様子が報じられていましたが、現在の大阪の実情を垣間見させられる心暖まる光景であると思われました。昨年の母の日礼拝は、イースター礼拝以後、3週続けて礼拝を休会した後、礼拝再開の再スタートの礼拝であったことを振り返りますが、1年前の大阪よりも現在の方が相当深刻な状況にあることを思います。今週も医療現場や介護施設等に従事しておられる方々の働きが支えられますよう祈ります。3度目となる緊急事態宣言が今月末までの延長となりましたが、オンラインでの授業が続く子供たちや学生の皆さんの上に、引き続き主のお守りと励ましが与えられますよう祈ります。

この母の日の礼拝が日本の教会の中に定着し始めたのは、今から100年程前と言われていますが、元々は1908年5月10日に米国のウェストヴァージニア州の教会で始まったのが、最初と言われてます。小さなメソジスト教会において40年近く日曜学校の教師をしていたクレア・ジャービスという老婦人がその3年前の5月9日に亡くなり、その娘であるアンナが敬愛していた母を憶えて、毎年その日に近い日曜日の礼拝においてカーネーションをささげました。その後、両親への尊敬と家族の絆を強めるべく、母の日の制定に向けて、アンナは地道な活動を行った結果、その働きが豊かな実を結び、今から113年前に「すべての母親に感謝する」礼拝が捧げられました。その後、アンナは盲目であった妹の世話をしながら、母の日の定着のための運動を続け、独身のまま84歳で天に召されたと言われてます。伝統的には、離れて暮らす母親を訪問することが慣習とされてきましたが、現在、コロナ禍にあって、それが大変難しい状況にあって、母親への感謝の思いをスマホやタブレットなどを通して伝えておられる方々が多いのではと思います。私たちは本日、母の日の礼拝を迎え、「汝の父と母を敬え」(出エジプト記20章12節)との聖書の御言葉を今一度思い起しながら、「神さま、お母さんをありがとう」との思いを持って、本日の礼拝に与りたいと思います。

さて、マルコによる福音書の3章に入っていますが、前回の3章7節以降12節の場面では、主イエスの噂がガリラヤ地方のみならず、広範囲に渡って広まり、大勢の人々が主イエスの許に押し寄せてくる様子について描かれていました。主イエスは弟子たちに小舟を用意させて、湖を渡るルートで群衆を避けなければならないほどの大勢の人ばかりであったことが分かります。はるか北に位置するティルスやシドンからも、どっと大群衆が押し寄せてきたというのは、よほど主イエスの行われた奇跡の業やファリサイ人たちとの議論の噂が広範囲に広まっていたことが想像できます。多くの病人たちが至る所から集まり、不治の病を治していただきたい一心で、主イエスに触れようと手を伸ばしている様子が書かれていますが、その様子を目にした汚れた霊が「あなたこそ神の子である」(11節)と叫んでいるのは、注目に値することと言えます。おそらく、その悪しき霊は信仰告白というのではなく、主イエスに対する敵対心や恐れから、そのような叫び声をあげたのだと思われます。主イエスはその悪しき霊に向かって、ご自身のことを決して言い広めることのないようにと厳しく戒めていますが、それは何故なのでありましょうか？おそらく主イエスのご自身の宣教活動が、その本質から離れて、熱狂的な群衆たちからこれ以上誤解されないように戒められたのだと思います。主イエスのガリラヤ宣教の第一義的な目的は、癒しの業そのものにあるのではなく、そのことを通して神の国の到来を告げ知らせるためでありました。よって主は、ご自身の休養も含めて、一旦、公の場から敢えて退かれたのでありました。

本日の聖書箇所は続く3章13節からとなります。「イエスが山に登って…」とありますように、主イエスが大勢の群衆たちから身を遠ざけられた場所というのは、山であったことが分かります。主イエスは祈るために山へ行き、そこで夜を明かし、翌朝、弟子たちを呼び集められたのでありました(ルカによる福音書6章12～

13節)。続く14～15節を見ますと、主イエスが12名の弟子たちを使徒として任命される目的が明確に述べられており、「…彼らを自分のそばに置くため、また、派遣して宣教させ、悪霊を追い出す権能を持たせるためであった。」とあります。つまり、使徒というのは派遣者(主)から権威を授けられ、福音宣教の務めを果たすために、派遣者の代わりにそれぞれの場所へ遣わされた者を指しています。16節以降、主のご依託を受けて使徒として召された12名の名前が記されていますが、実にバラエティーに富む名が書き連ねられています。先ず第一番目に名前が挙げられているのは、シモン・ペトロであります。彼は元々シモンというユダヤでは、ありふれた名前でありましたが、主イエスと最初に出会った時にペトロ(ギリシャ語で岩を意味する)という名が与えられました。けれども実際の所、彼の性格は固い岩のようなものではなく、不安定な直情型の性格でありました。筆頭弟子というには、あまりにも似つかわしくなく、彼が衝動的な気質であったことは、福音書の中の様々な場面から読み取ることが出来ます。ペトロにまつわる最も印象的な場面は、やはり十字架刑の直前に大祭司の中庭に彼が密かに忍び込み、そこで周囲の人たちから「おまえもあの連中の仲間だろ？」と問われた際、3度に渡り主を否定したあの場面ではないでしょうか？その直後に不甲斐ない自分の姿を振り返り、男泣きしたペトロであります。やがて主の復活の証人として内なる力が与えられ、その名の通り初代教会の礎を築くために大いに用いられるのであります。私たちは筆頭弟子として、このペトロの名前が先ず最初に登場するのを見る時に、神様という御方が懐の大きな御方であることを思わせられるのではないのでしょうか。次に来るのは、ボアネルゲス(雷の子ら)と呼ばれたゼベダイの子ヤコブとヤコブの兄弟ヨハネの二人であります。兄のヤコブと弟のヨハネともに、そのニックネームが物語っているように激しい性格の持ち主であったと言われております。彼らの母親であるサロメが息子であるヤコブとヨハネを連れて、主イエスの許へ行き「あなたが王座にお着きになる時には、一人をあなたの右に、もう一人を左に座らせて下さい」(10章37節)と頭を上げて懇願したという、あの場面が思い起こされますが、生来、野心家であった彼らを先のペトロとともに主の弟子の三羽鳥として、ご自分の側近にされたことを考えますと、やはりここにも主の寛大さと包容力の大きさを感じざるを得ません。続くアンデレはペトロの兄弟であり、彼もまたペトロと同じくガリラヤの漁師でありました。フィリポはガリラヤのベトサイダの出身であり、主イエスの宣教活動の最初の頃に召されて弟子となっています。次のバルトロマイについては、各福音書において常にフィリポに続いて名前が記載されているために、彼が主イエスを紹介して導かれたナタナエルのことではないか、と考えられています。ちなみに「ナザレから何の良いものが出ようか？」と、当初、懐疑的であったナタナエルに対して、フィリポは「来て、見なさい」(ヨハネによる福音書1章46節)と告げたことは良く知られています。マタイというのは、すでに2章で登場している徴税人アルファイの子レビのことをさしています。また、トマスというのは疑い深いトマスで知られたディディモと呼ばれるトマスのことをさしています。主の弟子たちへの復活顕現の後、一人だけその場に居合わせなかったトマスは「その手に釘の跡を見て私の指をそこに入れ、脇腹の槍の跡に私の手を入れてみるまでは、決して信じるものか」(ヨハネによる福音書20章25節)と豪語していましたが、8日の後、主がそんな彼の前にもみ姿を現された際、「私の主、私の神」と告白したことで知られています。「あなたは私を見たから信じるのか。見ずに信じる者は幸いである」との言葉を蘇りの主イエスから告げられ、やがてトマスは、遙か遠くインドの地まで赴いてキリストの福音を宣べ伝えたと言い伝えられています。アルファイの子ヤコブというのは、先のゼベダイの子ヤコブが「年長のヤコブ」と言うのに対して、「年少のヤコブ」とも言われています。タダイというのは、「ヤコブの子ユダ」と言われており、主イエスに従い、後に故郷であるエデッサ(現在のトルコ付近)に帰郷してそこで伝道したと言われています。熱心党のシモンというのは、その肩書が物語っているように、元は熱狂的な愛国主義者の一人であり、ローマ帝国による圧政下、自由を勝ち取るためには暴力をも辞さないという過激なグループのメンバーでありました。けれども、シモンはそのような急進的な運動の限界と空しさを知り、主イエスの弟子になったと考えられます。

最後に登場するイスカリオテのユダについては、「このユダがイエスを裏切ったのである。」(19節)と記されています。主イエスは全知全能の神の御子、救い主なのであるから、やがてユダがご自身を裏切ることを知っていながら、何故そのような人物を使徒として任命されたのだろうか?と、素朴な疑問を抱くのは自然であると思いますが、結論から言えば、その真相は神のみぞ知る、ということになろうかと思います。一方で神様は公平であり、全ての人に救いの機会を備えておられる御方であるので、彼が使徒として任命されてから、主を裏切ったことを後悔して自害するまで、悔い改め、主に立ち返るチャンスはいくらでもあったと思います。このイスカリオテのユダを含めた12名の使徒たちの職業や特徴、人柄や傾向 etc に改めて着目しますと、実に個性豊かな十人十色の人間たちを主は使徒として選ばれ、宣教の業に遣わされたことを思わされます。それも欠けや弱さを多く持ち、社会で爪弾きにされていたような人物もご自身の弟子として召し出され、彼らの生き方が主イエスと出会う以前の生き方から大きく方向転換させられていることが分かります。

現代の教会においても、神様は生きて働いておられ、様々な背景から主の呼びかけと招きに応じて、教会へ導かれた私たちを主にあって一つに結び合わせて下さり、宣教の現場へと遣わして下さる良きコーディネーターであると言えます。主は多種多様な才能や性格を持つ私たち一人一人を愛して下さり、福音宣教のために大いに用いようとしておられることを、本日の聖書箇所から私たちも心に留めたいと思います。

ペンテコステ(聖霊降臨日)へと向かう新たな一週間も、主が私たちといつも共にいて下さることを信じて歩んで行こうではありませんか。オリーブ山における主の昇天の出来事後、一所に集まり、心を一つにして祈り続けた、あの弟子たちのように、事態の収束を願いながら私たちも主に向かって熱心に祈り続けたいと思います。